

『疾病分類の弁証論治から生命の弁証論治へ』

■ 要旨

■ 目的

生長老死、それぞれの人生のステージにおける、生命の構造を把握することが、養生を促進し、疾病を治療していくための中心の課題であることを明らかにしていきます。

■ 方法

まず、「上下左右前後の法則」に描かれている北辰会鍼灸治療チャート図の弁証論治の方法を検討していきます。

その後、生命構造を把握するための弁証論治（以降、「生命の弁証論治」と呼ぶ）の解説を行っていきます。

■ 結論

生命の弁証論治と北辰会ひいては中医学の弁証論治とのもっとも大きく根本的な違いは、**疾病を捉えるために弁証論治のシステムを用いているのか、生命を捉えるために弁証論治のシステムを用いているのかという、基本的な姿勢の違いにあります。**

未病を治す医学であるという、養生を基本とする東洋医学においては、生命の弁証論治を行っていくことがたいせつとなります。

■ 考察

生命構造を把握するためにこそ、弁証論治は使われるべきです。そうすることによって、それぞれのライフステージにおける生命の構造が個別具体的に明らかにすることができ、個人々々、その時の状態に応じた生活提言を行うことが可能となります。

患者さん自身が生活を正しつつ、治療指針に基づいた治療の手が入れられることによって、生活の質を変化させ疾病を治療していくことができるようになります。

また、このような作業の積み重ねは、現代人の心身の状況についての新たな知見を生み出していくことが可能となります。現代の生活状況に基づいた生命構造を明らかにしていくことができるようになるわけです。

ここに、漢代に書かれた『黄帝内経』を越え、新たなリアリティをともなった現代の東洋医学が紡ぎ出される道があると考えています。

疾病分類の弁証論治から生命の弁証論治へ

—— 構造的人間観察方法の構築に向けて

住所 東京都大田区中央 1 - 6 - 1 3

電話 090-3792-4146

メール ban@1gen.jp

HP <http://1gen.jp/>

氏名 伴 尚志

■目次

はじめに	3
「北辰会方式鍼灸治療チャート図」について	4
「生命の弁証論治」チャート図	8
人間理解のための弁証論治	9
生命の側から観る一胃の気の脉診	10
症状	11
生命があるから症状がある —— 症状は生命の動きである	12
不定愁訴を弁証論治する	12
四診では生命の動きを捉える	13
症状取りは治療目標ではない	14
治療目標は生命の質の向上	14
治療のエビデンス—根拠はどこに置くのか	15
おわりに	16
参考文献	16
附；現在は、過去の集積、未来の始まり	17

■はじめに

弁証論治という言葉が中医学によって使用され広まって以来、治療技術を得るために弁証論治をしなくてはならないと思ってやっつけられた方もおられるでしょう。私は二十数年弁証論治という方法とつきあってきて、後輩にも指導してきました。その過程で、現在、中医学で行われている弁証論治の方法と私が行っている弁証論治の方法との間に大きな隔たりが生じてきました。ここではそのことについてお話ししようと思います。

幸い日本には北辰会という体表観察を伴いながら中医学を行っているグループがあります。25年ほど前に私はそこを卒業しました。その会では、体表観察をしつつそれを生かして中医学のシステムを活用しようとしており、私はそのことを高く評価しています。

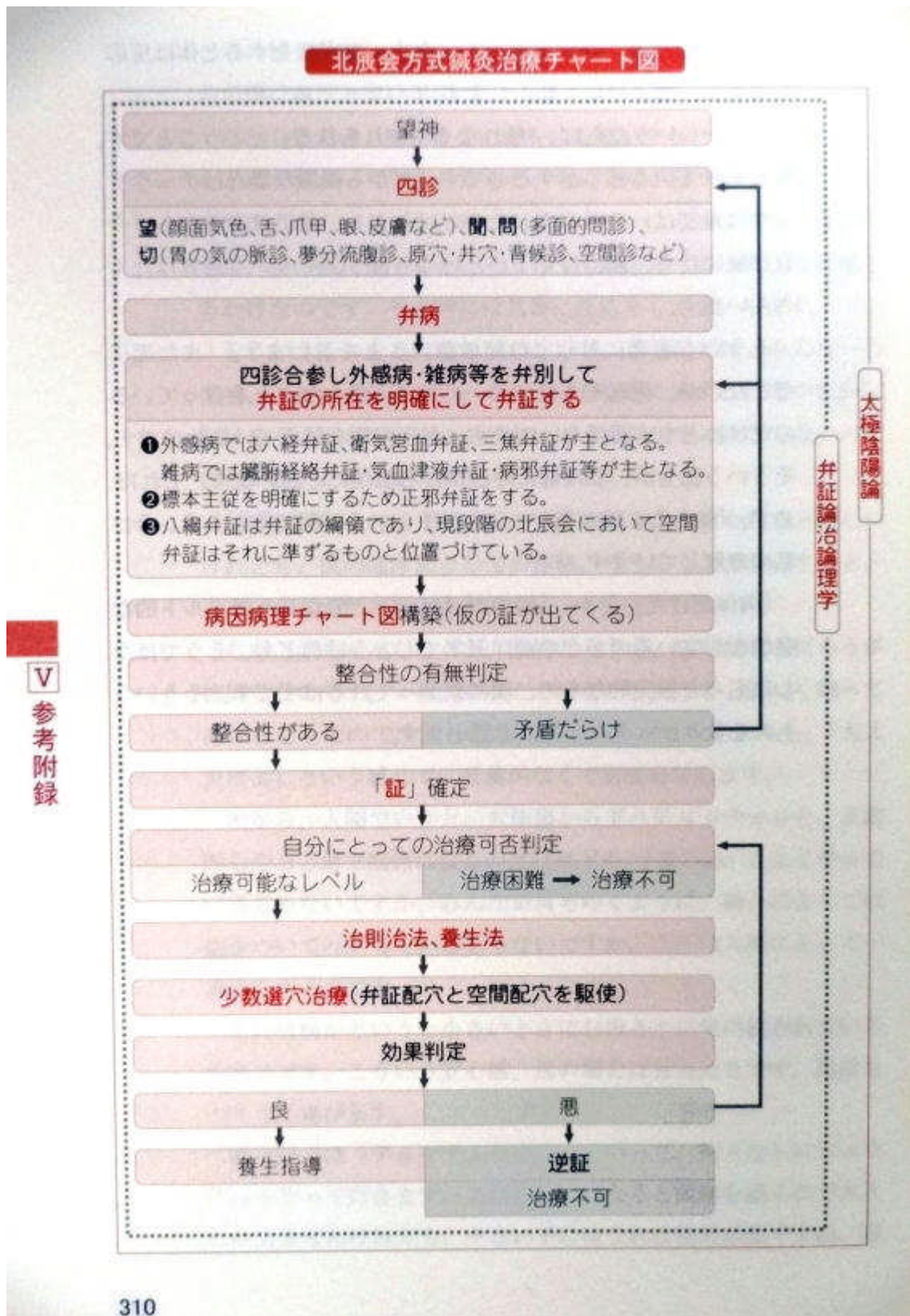
近年そのグループからさまざまな書籍が刊行されました。そのうち藤本蓮風著として刊行された『上下左右前後の法則』という書物に、弁証論治の定義が書かれていました。いわく、弁証とは『「病」の分析であり、それに基づいて治療を導き出す』ことであると。

残念ながら私はここに大きな違和感を感じました。その理由は、私が行っている弁証論治の目的を、現在の患者さんの生命の構造を明らかにするということにおいているためです。そのような姿勢で治療に臨むときに初めて、「現代の黄帝内経」を作ることができると考えています。単なる『「病」の分析』であってはならないのです。

治療家が、患者さんによって求められていることが、症状取りや病治しであるということでは理解できます。けれども、治療家の側としてそれをそのまま語ってはいけないのではないのでしょうか。なぜなら、病というものは人間のごく一部を表現しているものにすぎないからです。病む以前に人間は圧倒的に生きています。その圧倒的な生命の有様を明らかにすることを通じて初めて、症状とは何か、病とは何かということが理解されるのではないのでしょうか。弁証論治にはそのような生命の構造を明らかにしていく力があります。古典的な陰陽五行という観方を通して、これを明らかにしていくことができるのです。

ここからは、まず北辰会で行っているとされている「上下左右前後の法則」に書かれている「北辰会方式鍼灸治療チャート図」について考察していきます。そしてそれを踏まえて「生命の弁証論治」とその特徴について述べてくことにしましょう。

■「北辰会方式鍼灸治療チャート図」について



北辰会の弁証論治については上記「上下左右前後の法則」の310ページに「北辰会方式鍼灸治療チャート図」と題して示されています。望神を四診とは別においたり、弁証論治を弁証論治論理学と言い換えた上で、さらにそれを包括するかのようその外に太極陰陽論という枠組みを設けたり、証が確定し治療した後に逆証の判定を再度行ったりするため、かなり煩雑な図になっています（前頁）。

けれどもこれは、分けることが目的ではなく、総合的な直観を大切にしていること、さらにより親試実験主義の立ち場に立ち、ていねいな検証をともなう弁証論治にもとづいて治療を行いたいということを示していると私は理解しています。

そのように理解した上で、「北辰会方式鍼灸治療チャート図」を以下の通りまとめ直してみました。

【1】四診 望（顔面気色、舌、爪甲、眼、皮膚など）、聞、問（多面的問診）、切（胃の気の脈診）、夢分流腹診、原穴、井穴、背候診、空間診など

【2】弁病

【3】弁証

四診合参して外感病・雑病等を弁別して

弁証の所在を明確にして弁証する

1 外感病では六経弁証、衛気営血弁証、三焦弁証が主

2 標本主従を明確にするため正邪弁証をする

3 八綱弁証は弁証の綱領であり、現段階の北辰会において空間弁証はそれに準ずるものと位置づけている。

【4】病因病理チャート図構築（仮の証が出てくる）

整合性があれば「証」確定

【5】整合性の有無判定

整合性があれば証確定

矛盾だらけであれば四診や弁証段階に戻る

【6】自分にとって治療可能であれば治則 治法 養生法を定め

治療困難であれば治療不可

【7】治則治法、養生法

【8】少数穴治療（弁証配穴と空間配穴を駆使）

【9】効果判定で良ければ養生指導し、悪ければ逆証として治療不可

以上「北辰会方式鍼灸治療チャート図」はおおむね9段階に分けられています。そして、検証のために前の段階に戻ったり、治療できないために患者さんを手放したりする「外への矢印」をとまなうチャートとなっているわけです。

これをみて私がまず不思議に思ったのは、【1】と【2】の関係性でした。四診をして次に出てくるのが弁病であるというところです。まるで弁病をするために四診をしているようにみえます。なぜ、こんなに早い段階で弁病しなければならないのでしょうか。「生命の弁証論治」をする場合には、弁病は二の次です。弁病を抜く場合も多々あります。弁病をするよりも、四診で得た情報を五臓にどのような濃淡で振り分けられるか検討する「五臓の弁別」の段階と、その生命状態の変遷を眺める「病因病理」が先にきます。弁病はできれば嬉しいけれどもできなくても大して問題にはなりません。弁病し分類することを目的としていないためです。患者さんの現在の丸ごと一つの生命をまず、「一」として措定し、それを眺めるために陰陽五行を使い工夫を凝らしているためです。

そのように考えているうちに、昔北辰会にいた当時にやっていたことで思い出しました。それは、弁病して『証候鑑別診断学』を調べて弁証と論治の参考にするということでした。「北辰会方式鍼灸治療チャート図」では『証候鑑別診断学』の利用については触れられていません。けれども、弁病の後すぐに使用する弁証を決めることができ、そのまま病因病理を作成することができるとしているわけですから、おそらくこの段階で『証候鑑別診断学』を利用しているのでしょう。

そして病因病理を作成したにもかかわらず、そこから出てくるものが仮りの病因病理チャート図であって病因病理の決定ではないということも興味深いところです。病因病理を作成した後にあらためてその整合性を検討しなければならないという点からみても、ここで何らかの外部の参考書を利用しているとみることができます。そしてそれはおそらく『証候鑑別診断学』なのでしょう。

おもしろいのは、病因病理を作成した後に再々度、整合性の有無の判定をしていることです。「生命の弁証論治」では整合性を確認しながらそれをなぞるようにゆるみ揺らぎを多めにとりつつ病因病理を作成していきます。ですから、病因病理を作成した後に整合性を考えるということはありません。整合性がなければ病因病理を作り替え、納得いくまで検討していくためです。証の作成は、現時点で何をなすことが患者さんにとって最適だろうかという角度から病因病理を要約したものとなります。ですので証を決定する段階で再度「矛盾だらけであれば四診や弁証段階に戻る」ということはありません。

四診が未熟であれば未熟なりに、五臓の弁別が未熟であれば未熟なりに、病因病理の

作成が未熟であれば未熟なりに、とりあえず今できる最高の手立てを患者さんに対して尽くしたい。そのような思いを掬^{すく}っていきたいと「生命の弁証論治」をたてるうえで私は考えています。そのため、「揺らぎ」をととても大切にして弁証論治をたてていくわけです。

この「揺らぎ」というのは生命力が本来もっている弾力性のことでもあります。病気治しということに着目してしまいますと、すぐに誤治や逆証ということに目がいきます。けれども鍼灸一発で殺すことができるほど人間はヤワではありません。外部からの攻撃に対して対抗するだけの力が本来備わっているものです。それを信頼しつつ、「悪化させない」「良い循環にその生命をもっていく」という観点から、関わりを最小限にしながらその生命力に寄り添うことのできる方向を探っていく。これが治療であると考えています。

ですから、【6】自分にとっての治療の可能であれば治則 治法 養生法を定め、治療困難であれば治療不可。という発想はそもそもありません。自分の無力を受け入れつつ最善を尽くしてその生命に寄り添うことが、「生命の弁証論治」で求められていることです。それはその生命の灯が消えるときただ悲しみの涙とともに寄り添い手を握っていることだけしかできないとしても、そこに自身を置くことを覚悟しておくということを意味しています。

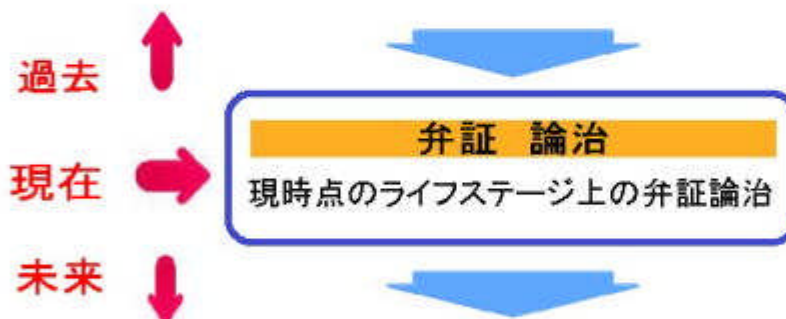
ですから、【9】効果判定で良ければ養生指導し、悪ければ逆証として治療不可。ということも「生命の弁証論治」ではあり得ない姿勢です。断られるまで寄り添い続けることを基本姿勢とするためです。逆証であっても提供できる情報を提供しながら最善を尽くす、ということが我々のやり方です。これは逆証のものに手を出したということで誹りを受けることにもなりかねません。けれども求められているのであればその誹りを受けたくないという心はエゴとして排除し、できることを提供していきます。

「北辰会方式鍼灸治療チャート図」は、中医学の弁証論治のもっとも良心的かつ臨床的なものであると思います。けれどもそこで表現されている弁証論治の方法と我々が提供している「生命の弁証論治」の方法とでは、このように非常に大きな違いがあります。

その理由のもっとも大きなものは、疾病を捉えるために弁証論治のシステムを用いているのか、生命を捉えるために弁証論治のシステムを用いているのかという、基本的な姿勢の違いにあります。

生命の弁証論治

目的 気一元の生命をありのままに把握し、課題の解決を図る



治療指針(治療者側)	生活提言(患者側)
関わり方を明示して未来を予測する 治療家側でできることを明らかにする	現状のまま推移した未来の提示
鍼灸を含め数多くの方法がある	生活の質を向上させる方法 養生法の提示
治療家側がどこまで関わるか あらかじめ決めておく必要がある	不妊治療など目的が明確な場合は 西洋医学の知識なども提供する

■人間理解のために弁証論治はある

「生命の弁証論治」はその名の示すとおり、目の前にいる患者さんの生命の構造を理解することを目的としておこなう弁証論治です。人間理解のための弁証論治と言い換えることができます。それは、臨床検査によって病名を定め治療法を決定する西洋医学の方法とは異なります。また、病名にしたがって証候鑑別診断学を調べて病因病理を推定し弁証の鑑別診断をしようとする中医学の弁証論治とも異なります。

中医学の弁証論治において「病因病理を考えていく」という言葉を用いて表現しているものは、病気の原因について考察し治療法を求めるところにあります。これに対して生命の弁証論治において「病因病理を考えていく」という言葉を用いて表現しているものは、その患者さんの人間理解を進めるということを意味しています。それは、生長老死、それぞれの患者さんの人生のステージにおける生命力の状態を考えつつ、現状を把握し、その中で症状がなぜ出ているのかあるいはなぜまだ出てこないのかを考察していくものです。

ですから「生命の弁証論治」は、病の時期だけではなく、患者さんの生活状況やライフステージに応じた生命力の状態について着目します。現在主訴となっている症状の経過だけでなく、その生命力の状態の変化に応じた体調の変化に着目していくわけです。このため、これまでの生育状況や生活環境を問うことをことにたいせつにしています。

■生命の側から観る—胃の気の脉診

生命の側から観るといふことは、胃の気の脉診に通じるところがあります。胃の気の脉診というのは、脉診全体を通じてその生命力を感じ取るということです。脉状に名前をつけ、それぞれの脉状の意味やともなう症状を記載するという方向性ではなく、一つの生命の変化を脉状を通じて動きとしてみていくことが、胃の気の脉診の特徴です。胃の気の脉診の見方と同じように、全身に表現されている症状というものも実は、一つの生命の変化が動きとして表現されているに過ぎないとみることができます。これを生命の側から観ると呼んでいるわけです。

生命の側から観ると、生命のダイナミズム — 生命の表現の一つ — として症状を捉えていくことができるようになります。そのため症状や病名や証といった固定された静的な概念から解放されて、患者さんに対して自由自在に対応できるようになります。

養生の先に治癒があるという大きな発想はここに生まれます。生命力が充実していくことによって、自然な治癒能力が高まります。あたりまえのことのようですが、この意味するところは非常に深いものです。養生をするということは、日々の生活習慣を調べていくということです。日々の生活を調えるということは、家族や民族の美意識にもつながります。またそれは固有の宗教につながりもします。あるいは倫理道徳といったものともつながります。これらは生活習慣を形成する基本となるものだからです。

心の動きを納め身体の動きを納める、この知的営為はまた、鍼灸治療として身体への無言の働きかけを通じて成就させることができます。その意味で鍼灸は、身体の言葉を聞き、それに従って身体に本来備わっている生命力を応援する方法であるとも言えます。この生命の言葉を詳細に聞く方法が「生命の弁証論治」なのです。

治癒という言葉が意味する範囲には、症状が取れるということや疾病の治癒や証の転換がおこるという意味があります。「生命の弁証論治」ではこの「証の転換」の中身を深め、生命の質が一段階向上して、さまざまな疾病に侵されにくくなるということを治癒の意味としています。これは症状治療という縁を通じて、未病を治す東洋医学本来の目的に沿った手当をするようになることが治療の本来の眼目を得ることである、ということの意味しています。

ですから、個別具体的な弁証論治を立てることによって、個別具体的な生活提言をすることができるまで、弁証論治の質を高めていきたいと考えています。西洋医学の技術を借りることももちろんその中に含まれています。

「疾医」と肩肘を張って治効を競うのではなく、今自分ができる最善のことを患者さんに提供する。そのことを絶えず自分自身に問いかけながら、無理のない治療を行っていきます。あくまでもその生命に寄り添って問題解決方法を探ろうとします。ですから、問題解決の選択肢が増え、より患者さんの人生に沿ったアドバイスができるよう工夫していくことができるわけです。

■症状

生命の揺らぎを症状という

生命を調えるものを生理的な症状と呼び
生命を損なうものを病理的な症状と呼び

正邪の闘争がある場合を生理的な病位と呼び
正邪の闘争がない場合を病理的な病位と呼ぶ

生理的な病位は戦場であり
病理的な病位は死線である

外的な刺激から発生した生命の揺らぎを外感と呼び
内的な衰えから発生した生命の揺らぎを内傷と呼ぶ

外感によって引き起こされた症状は多くの場合
生理的な症状であり
内傷によって引き起こされた症状は多くの場合
病理的な症状である

「生命の揺らぎを症状という」と言う時、生きることそのものが症状であるというべきであるという言葉がそこには包含されていると見なければなりません。そしてそれは、患者さんが違和感を感じ、治してほしい取り除いてほしいと思う症状とは、異なるものとなります。患者さんの嗜癖や生活習慣の偏りなども症状の中に入るわけです。

「生命の揺らぎを症状という」わけですから、四診を通じて把握できる患者さんの生命の動きも症状であるとも言えます。

ここでの症状という言葉の中には、以上のような広い意味合いが込められています。

症状というものは単独に存在しているものではありません。圧倒的な生命がその背景には存在しています。生命が存在してそこに動きがあり、それに患者さんが違和感を感じた時、それは症状と呼ばれて表面に表れてきます。いわば深い海底で動きがあった時、海面で現れる徴候のうち、患者さんが違和感を感じるもの、それが症状です。ですから症状に対して治療をするという発想しか持てない時、その治療家は海面に現れる波を打ち消そうと必死になっているにすぎないと言えます。

海底の動きには自己改善を図るための動きと、悪化傾向の動きとがあります。慢性病の場合、悪化傾向の動きは徐々に起こり目に見えにくいものです。徐々に衰えていき、あるきっかけによって一気に症状が表面化します。きっかけには精神的なものも肉体的なものも含まれます。

このあたりのことを病と呼んで、さまざまな病名をつけます。病名としてまとめられた症候群を治療法によって分類したものが証です。古来の治療家のその病に対する考え方をまとめ、治療方法を鑑別して分類したものが、証候鑑別診断学です。

同じ病名でも異なる治療法が存在しているのは、異なる病状や体質があるためです。そのため、このあたりのことを鑑別し、正しい治療法を求めようとするわけです。

ここまでの方法は結局、症状を中心に考えています。症状を取ることを目標とし、四診を用いて病を分析しているにすぎません。

■不定愁訴を弁証論治する

不定愁訴といった「複合的症状を持つ人間に対する弁証論治」という観点が必要になっている現代において、ある特定の疾病やある特定の症状だけを根拠にして弁証論治をしていくと、患者さんの本当の状態を見誤ることになります。全体的な「人間」を把握することが、症状に焦点を合わせてはできないからです。

そのため、生命全体の動きの中から全体を見通す「生命の弁証論治」が必要となります。

このあたりのことを張景岳は、『病氣の本はただ一つであり、隠れて明かにし難い。病変は非常に多く、表面に現われているため明らかにし易い。そのため最近の治療家には、本末を理解できないまま、ただ目前に現われている症状を根拠にして治療している者が、多いのである。これは、我々の医道にとって最も大きな問題であると言わねばならない。』と、語っています。(『景岳全書』〈伝忠録 標本論〉)

「病氣の本」のことを生命の方からみて表現すると、構造としての生命の歪み、現象としての気の濃淡ということになります。そしてこれを治療の方から語ると、生命の歪みを正し気の濃淡を調える、という表現となるわけです。

鍼灸師はまさにこれを行うことを眼目としており、日々の治療処置として実施することができます。

そのためのシステムティックな方法が「生命の弁証論治」なのです。

■四診では生命の動きを捉えている

四診において現れているのは病ではありません。身体全体の動き — 生命の動きです。ですから、四診を用いて捉えているものは生命の動きである、ということが理解されなければなりません。

四診で捉えられた生命のごく一部に「病」と呼ばれる部分があります。ですから、生命の状況をしっかり眺めていく「生命の弁証論治」を基本に据えなければ、その生命の理解ができないのです。そしてそれを基礎にしなければ、その生命のごく一部の動きである「病」の理解もできない、ということになります。

病を理解するためには、生命の根幹の流れを、動きの中で把握していくことが大切です。弁証論治で明らかにされた根本を叩く、あるいは調えることによって、諸症が発生しにくい身体を獲得させていくということが治療家の目的となります。

生命が存在しているところに初めて病は存在しています。生命がないところには病はありません。探るべきことは病のカテゴリー分類ではなく、生きて動いている生命の動的構造です。体表観察を人間理解のための弁証論治に採り入れ、日々の臨床の中で行うことのできる鍼灸師にとって、この生命の動的構造を探りながら治療の手を入れていくということは、まさに得意分野であると言えます。

そしてこのような臨床を日々積みかさねていくことによって初めて、未来の学究のために遺すことのできる『黄帝内経』のような古典を今、築き上げることができるわけです。

■症状取りは治療目標ではない

さて、生命の弁証論治の治療目標は、症状を取るということに置くわけではありません。

生命があるから初めて症状があります。生命がないところには症状もありません。症状は、身体の変動を指している言葉です。身体の変動には、よくなる方向への変動と、悪化していく方向への変動があります。よくも悪しくも安定しているときには表面化しないものです。

このことは、安定している身体に変動が起こって症状が出ることによって、より質の高い身体を獲得する可能性がある、ということも意味しています。治療者としては、どのような理由でその生命状態の変動が起こっているのか見極めることがもっとも大切なことなのです。その症状が、生命力が充実していく過程で起こっているのか、生命力が低下していく過程で起こっているのかを、きちんと弁別していかなければなりません。

その上で、生命力の状態がどのように変化したのか、させていきたいのかということを考えていく。これが治療指針となるわけです。

■治療目標は生命の質の向上

それでは治療目標はどこに置くべきなのでしょう。

未病を治す医学であると東洋医学を位置づける時、生命を養う — 生命の質を向上させる — ということが東洋医学の中心課題であるということに思い至ります。

病が起こり症状が出てから治療するのではすでに出遅れているわけです。症状が出る以前に、病名が定まる以前に、自覚があろうがなかろうが身体の変調を調える、ということが

目標となります。

弱い部分を強くして、生命の質を絶えずより良い状態に置くように努力することが必要なわけです。これが本来の意味の未病を治すということであり養生という言葉の意味です。

ですから、もし訴えている症状が消えても治療が終わるわけではありません。生命力が一段階上がって、生命の質が向上した段階、あるいは患者さんのさらなる自己実現の基盤としての生命力の質の維持向上のためのサポートとして、鍼灸治療を位置づけ用いなければなりません。

そしてこのようなタイプの養生は、より良い生への希求の手助けともなり、また、死に至るまで続きます。より質の高い生命を手に入れるという目的のためにも、またよりよい死に向かう流れの中でも、治療の手を入れていくことができる、それが東洋医学です。

生命の弁証論治は、このそれぞれのライフステージにあった、弁証論治と治療指針を提供することができます。

また、症状をとるということよりも、なぜその症状を呈しているのか考え、ほんとうの問題がどこにあるのかということを探究し、生命の質の向上を目指すことができます。

生命の弁証論治と名づけていますけれども、質の高い死をみとるということも視野に入れるべきだと考えています。

逆証であったり、自身の手に余るような状態であっても、西洋医学の手を借りるということも含めて、治療者側にできることをすべて模索していくわけです。

■治療のエビデンス—根拠はどこに置くのか

それでは、生命力を向上させるという際に、そのエビデンス — 根拠はどこに置くのでしょうか。

それは、治療家が把握する四診情報の改善に置きます。脈診においては胃の気の脈診の状態が良くなるということです。経穴診においては処置穴の反応の良い変化がみられるということです。また、診処としている経穴の良い変化がみられるということです。顔色や舌

診、脈診、腹診、皮膚の状態などの良い変化がみられるということでもあります。これらのことは毎回の処置の前後で判定することができます。

患者さん自身が生活姿勢に心を配り、治療後の生命状態をそのまま維持して次回来院することができれば、さらに次の段階の処置を行うことができます。

そのような作業を繰り返していくことによって、徐々にではありますが体質そのものを変えていくことができます。

■おわりに

西洋医学による病名分類と同じように中医学による証候分類には、生命の波濤としての病を治療するための膨大な資料が積み上げられています。けれども、もっとも大切な生命という深海の動きについてはほとんど語られていません。生命としてそこに存在している人は、気一元のまるごと一つの間人です。病名がつけられて分類されるようなものではないのです。

また多くの症状を同時にもっている現代人にとって、その底流にある生命力の構造の歪みや動きは、そのさまざまな症状として一時的に表面化しているにすぎません。

そのような人間を捉えることは、生命の動きを見つつ気の厚薄を眺め、症状同士の関連をつかみ、まるごと一つの生命構造の中で全ての情報を改めて理解し直すことによってしか、可能にはなりません。

症状にとらわれた弁証論治ではなく、生命の動きにのっとった弁証論治、生命構造の状況を動的に書き著すことのできる弁証論治が必要となるのはこのような理由によるものです。

■参考文献

- 「一元流鍼灸術の門」 伴 尚志 著 2014年 増補改訂第3版 たにぐち書店刊
「景岳全書 伝忠録」 伴 尚志 訳 2014年 たにぐち書店刊行予定
「上下左右前後の法則」 藤本蓮風 著 2008年 メディカルユニコーン刊

■附;現在は、過去の集積、未来の始まり

「生命の弁証論治のチャート図」で、弁証論治の左側に不思議な赤い三つの矢印が書かれています。そしてそこに、上向きの矢印の左に過去と、下向きの矢印の左に未来と、弁証論治をさして現在と書かれています。

この部分についてサブコースで少し話題になりました。上の枠囲みが過去のことなのでその枠組みに過去と書き、下の枠囲みは未来のことなのでその枠組みに未来と書き、弁証論治の枠組みに現在と書いたほうがすっきりするのではないか、というものです。

確かにすっきりはするのですが、そのように分けてしまうと、この図が生きてこないのではないか、と漠然とした違和感を私は感じました。すっきりはするのですが、生命のふくよかな味わいが感じられなくなる気がしたのです。

生命には現在しかありません。リアルに生命を感じられる時は現在この瞬間でしかありません。そしてそのようなリアルな生命には、言葉が入り込む余地はありません。「現在を感じている」という言葉を発したとたん、そこにはリアルな生命がなくなります。

弁証論治の示す「現在」というのはそのような厳密な意味での「現在」ではありません。けれども現状を表現する時間的な揺らぎをともなった現在です。それは現在のライフステージの状態を表現し（弁証）それを改善する道筋を示している（論治）ものであると考えることができます。

「現在」は過去の集積です。現在に含んでもいいほど近い過去である「四診」を含め、過去のライフステージについての情報を集め分析し統合して表現することによって、「現在」を作り出している過去をまとめ、現在の状況をみようとしているわけです。

その弁証論治にもとづいて、未来へ向けて今を変えていこうとする行為が治療となります。治療家側としては「治療指針」で示されているものがそれであり、患者さん側としては「生活提言」として提案されているものがそれです。現在をしっかりと踏まえて、未来を作り出す共同作業が治療であり、ここに提案されているものなのです。

このように意識しつつこの図を見なおしていただくと、さらに深い味わいをこの図から感じとることができると思います。